



三
チ
コ



西江孝之

倭成出版社

ニチコ

一九八一年九月一九日初版第一刷発行

定価——九八〇円

著者——西江孝之

発行者——古川 司

印刷所——株式会社清水印刷所

製本所——株式会社若林製本工場

発行所——株式会社佼成出版社

〒一六六 東京都杉並区和田二ノ七ノ一

電話(〇三) 三八三―三二五一(代) 振替東京七―七六一

造本者——杉浦康平・赤崎正一

検印省略 落丁本・乱丁本はお取り替えます

©1981 Takayuki Nishie Printed in Japan

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めて下さい。

ISBN4-333-01032-2 C0023



西江孝之

チ

倭成出版社

コ



目次

1 — 砂漠の電話 — 5

ミスター・ニシエか？

頑張れ！ 三千子

2 — 突然、ことが、…… 15

オレだ、わかるか

図面の矢印

憲際の三千子

あなたの名前は？

看護する義父

三千子の生いたら

3 — 深夜の郵便配達さん — 49

見えない爆弾

出会い

いのちの爆発

思い出の黄金のロバ

へその精神

大学構内の片隅で

4 — アフリカのタマゴ — 101

枕もとの酸素ボンベ

ラブレター

お帰りなさい

気を弱くする追憶

ンゴロンゴロ

飢渴の旅

5 — 血と言葉 — 143

ふくらんでいる心臓

血の意味

6 — 花のように描く — 165

言葉の積木

石ころに描いた顔

夜の中の赤い葉

ゴータマ・ブッダ

7 — 愛の相棒 — 201

留守番電話

蜜蜂の旅

友人

「絵」爆発

8 — 新しい恋人 — 243

七年目の冒険

家々の灯

新しい恋人



繪圖制作者——西江三千子

写真撮影者——山崎陽一＋牛尾喜道＋西江孝之＋斉藤貢一

造本者——杉浦康平＋赤崎正一



1

砂漠の電話

ミスター・ニシエか？

一九七四年十月一日、モロッコのカサブランカ空港に着いた私は、係官の執拗な検問を受けた。

「ミスター・ニシエに間違いありませんね」

私は文化映画『人間と住居』の撮影のために、フランス、スペインを経てモロッコに到着したばかりである。撮影スタッフを連れ、三百七十キログラムという膨大な器材を持ち込んでいた。当時はハイジャックが多発していた頃なので、私は悶着を避けて、自分が西江だと言い、自ら進んで三百七十キログラムの器材を開いて見せた。しかし係官は器材を調べるわけでもなく、

「どこのホテルに泊るのか」と重ねて質問する。

私はホテルの名を告げた。

一体に私は海外取材の際にホテルの予約をしない。行きあたりばったりで、どこにでも泊り込む。撮影のスケジュール自体が変更される場合が多いので、その方が便利なのだ。しかし今回は違っていた。スペインでの撮影の最後の場所、ジブラルタル海峡に面した、大画家ピカソの生まれ故郷の町マラガで、カサブランカはちょうどイスラム教の断食の季節ラマダーンの最中だと聞いていたからである。

係官はそれ以上何を聞くわけでもない。私が西江であることを再三確認し、ホテルの名を尋ねたあと、手帳に何事かをメモして立ち去った。私は一瞬いぶかしい気がしたが、そんなことに気を使っている暇はない。撮影旅行というのは、こういったことの連続だからだ。

今回もフランスからスペインのマドリッドに入ったときに、ひとつの問題が持ち上がった。税関の係官が我々の器材を見て、これはこれこれの金額のものであるから保証金を置けと言うのである。私はさんざん交渉したあげく、向こうの言う三分の一ほどの金額、日本円にして百五十万から二百万ほどの保証金を置いた。私たちはマドリッドに戻ってからモロッコに向かうではなかった。マラガからカサブランカに飛ぶのである。私は預けたドルを必ずドルで、マラガで返してもらえよう念を押すのを忘れなかった。

しかし事は単純には運ばないのである。驚いたことに、マラガの空港ではそんな大金はここには無いと言うのである。無いで済まされる問題ではない。次の便まで待ってくれと言うけれども、次の便は二日後である。私は一生懸命に食いつがって、髭面の将校の係官に、空港にある土産物屋から金を借り集めさせた。これがドルではなくスペインのお金なのである。集まったのが飛行機が飛び立つ五分前、私は一応安堵して、飛行機の中で金を数えた。

当然のことながら、モロッコではスペインのお金は通用しない。パーサーを呼んで、カサブランカでスペインのお金をドルに換金することが出来るかどうか確かめてみると、スペインのお金はスペインの銀行でなければドルに換金しないだ

ろうと言う。とんでもない話だった。私はたまたま飛行機がタンガという所に降りたときに、そこでまた係官とやりあって、その金をモロッコのお金に換えた。

そのタンガでも、警官のような男に、

「日本人のミスター・ニシエは乗っているか」

ということを聞かれた。私は換金のことがあったのでそんなことを聞くのだらうと、気にも留めなかった。

ラマダーンの季節、夜のカサブランカは暗く静かで、独得の白い建物が闇の中に浮かんでいた。私たちは空腹だったが、断食をしているのだから食べものがあるはずもない。それでもどうにかこうにか夜の十一時半頃に粗末な食事を済ませて、ようやくベッドに入ろうとした。そのとき、かん高い音をたてて電話のベルが鳴り響いた。

「もしもし、西江さんでしょうか？ 確かに西江孝之さんでしょうか？」

何度か耳にした同じ質問が、今度は受話器から日本語で飛び出してくる。そうだと答えると、こちらは日本大使館だと言い、それから、

「あなたの奥さんが危篤です。詳しいことはわからないのですが、ともかく危篤です。すぐに帰国してください」

私は一瞬、棒立ちになって自分の耳を疑った。

三千子が危篤だって？ なぜだ？ なぜ危篤なのか？

東京を発つときに、いつもはそんなことをしないのにもかかわらず、いつまで

も、どこまでも私を追ってついて来た三千子の姿を思い出した。もういい加減に帰れと言っても帰らない。

陽気に口喧嘩して別れたのだ。

交通事故だろうか？ しかしそれは大使館ではわからないという。各方面から電報やテレックスが二、三十通来ているので、とにかく大使館のほうに出頭して欲しいと言っている。出頭しろと言われても、カサブランカから大使館のある首都ラバトまでは二百キロもある。

三千子、おまえは一体どうしたのだ！

私はともかく東京に電話をかけてみることにした。かけてみることにしたというのは、うまくつながるかどうかわからないからである。インドもそうだが、ここモロッコでも、電話の事情は極めて悪い。電話の形をした物体があるにはあるけれども、一向につながらないのだ。

ようやくモロッコの中央電話局を呼び出すと、パリ経由かニューヨーク経由か、それとも宇宙衛星に乗せるのかなどと言っている。私はつくづく自分と三千子とをへだてている地理上の距離の遠さを思った。三千子は東京で危篤になっている。原因さえ知ることが出来ない。そして自分は北アフリカのモロッコ、カサブランカにいるのだ。

電話を申し込んだあと、私はスタッフを集めて事情を説明した。スタッフは直ちに大量の撮影器材をジープ三台に積み込んだ。

私はたとえスケジュールを短縮してでも、サハラ集落の撮影だけは絶対にや

って帰るつもりだった。

「監督ノ それは無茶ですよノ すぐに帰ってください」

「文句があるのならおまえがオレの代りに先に帰れ。オレは撮って帰る」

スタッフと私はやりあった。

よく映画の仕事をしていると親の死に目にも会えないと言われる。私は覚悟を決めていた。この『人間と住居』という映画のために、春からずっと走り廻ってきたのだ。日本は沖縄、奄美大島から東北まで縦断し、アメリカに渡ってシカゴ、フィラデルフィア、ワシントンなどを撮影してきた。そして今回のフランス、スペイン、モロッコなのだ。このモロッコが最後の場所だった。責任は果たさなければならぬ。映画づくりを愛し、自分を支え続けてくれた三千子も、それを望むに違いない。私はホテルの窓から、暗いカサブランカの街々を眺めた。窓ガラスに自分の姿が映っていた。

二時間半かかって、ようやく東京が出た。しかし、つまり始めると何度もつまずく。電話は全く知らないどこかの会社の事務所につながっていた。当然、何を言ってもらいがあかない。私は焦った。倒れた原因だけでも知りたかった。少なくとも自分に連絡がついたことだけは知らせてやりたかった。しかし今はその手だてもない。私は電話を置こうとした。すると、

「監督ノ その電話を切っちゃだめだ」

という怒鳴るような声が聞こえた。以前、『メナムに陽が昇る』という映画をつくったときに、六カ月もの間タイで行動をとにした撮影助手の杉山君だっ

た。彼は私の手から受話器を引つたくと、怒鳴った。

「お願いです。人間の命がかかっているんです。そこに電話がもう一台ないでしょうか？　ありませんでしたらこの電話を今から言う番号につないでください」

しかしそんな方法で電話がつながるはずもない。結局、その会社の人にお問い合わせして、危篤の連絡が確かに届いたことを伝えてもらうだけに終った。

ホテルからモロッコの中央電話局、そしてそこからニューヨークかバリ、そしてさらにニューヨークかバリから東京、そして東京の中央電話局からはじめて個人の電話につながる。その過程のどこかで、番号が誤伝されたのに違いなかった。ダイヤル国際通話など夢のまた夢のモロッコなのだ。

頑張れ！ 三千子

私たちは眠ることもなくジープに分乗して、撮影器材とともに夜の底を首都ラバトに向かって走った。まるで夜逃げだった。

走っている途中、はじめて私は悲しく情けなくなった。原因が何であれ、危篤は危篤に違いなかった。そして危篤とは死にそうだということなのだ。

三千子、頑張れ。生きていてくれ。

心の中で私は祈った。

車窓の外を異国の眺めが走り去る。



死んじゃだめだよ。三千子。

彼女の笑顔が幻のように現われては消える。

そして車は走り続けた。

大使館にきても結局、危篤の原因はわからなかった。しかし、ただけのことはあった。日本の大使館は普通、プライベートな事での中継ぎはしない。たまたま私の弟が言語人類学という風変りな学問をやっている、この前大使にアフリカの言葉を教えていたというようなことがあった。またこの弟は交換教授として長くアフリカに駐在していたし、大学でも教え、ヨーロッパでもいろいろな仕事をしていた。その関係で様々な場所に連絡をとることが出来た。一方では外国との貿易の仕事をしている兄がアメリカの商會社などを通じて、私をつかまえるべく徹底的にテレックスを入れ続けていたらしい。そして昨夜の電話ということになったのだ。

私はラバトで飛行機の手配をした。この飛行機がまた毎日便があるというわけではない。結局次のパリ経由東京行きの便まで、なか二日あることがわかった。

行動開始だった。

この二日の間に一週間分のスケジュールをこなさなければならない。私たちはまるで特攻隊の隊員のように鉢巻きを締めて走った。目的地のマラケシュまでは、一度カサブランカに戻ってさらに二百キロあまりの距離だ。そこからサハラ砂漠に入って目的の集落の撮影をする。

車は猛烈なスピードで走った。泥づくりの集落が幾つも飛んでは消え、目の前

に赤茶けた荒地が拡がり、それはやがて鼠色の砂漠に変わった。

ああ、三千子よ、おまえは一体どうしたというのだ？

四年前の一九七〇年、私たち二人は一緒にこのアフリカにいたのだった。その楽しい旅の日々が私の目の前によみがえる。大きな目をキラキラと光らせて笑っていた三千子の元気で健康な顔がよみがえる。

負けるなよ。ここで死んじゃいけない。俺はすぐに帰る。待っているよ。

猛烈なスピードで走る車の中で、私は噛みつくようにして、スタッフに撮影の手順を指示した。

アトラス山麓に入ると、道路はあってもないようなものである。私は地図を座席に放りだすと、消えかかる道を見失わないように目をこらしながら、手探りでマジック・インクをつかんだ。そして、アスギン・ウリカという地名をアラビア語で大きくノートの表紙に、素早く書いた。

外に目をやると、バック・ミラーにオートバイが飛びこんできた。

「よし」

私は思わず叫んだ。

車をオートバイに並行させて走らせると、運転している男に、私は怒鳴った。

「ここに連れてってくれ！」

男は、ノートの地名を見ている。

私はポケットからモロッコ紙幣をだすと、二つに引き裂いて、片方をその男の顔につきつける。

「これをやるから、オレをここに連れてってくれ。残りは着いたら、やる」
私は破った紙幣をヒラヒラさせて、二枚をくっつけたり、離したりして見せた。

男は、ニッコリ笑うと納得して、その紙片をひたくと、ダッシュして、オートバイを私たちの車の前にだすやいなや気違いのようなスピードで走りだした。

アスギン・ウリカは山肌と同じ色の、赤茶けた保護色の村である。

私たちは車から飛びおりと、モスク、泥づくりの家々、広場を、アングルを変えて撮りまくった。

「狙った獲物は片っ端から、確実に撃ちおとせ！」

カメラマンの山本君は、カメラを手持ちにして、塀の上にのぼったり、路地に伏せたりして、手早く撮影を進める。

サハラ砂漠に入ると、強烈な光線が砂に反射して、頭がくらくらした。負けるなよ、三千子。死んじゃいけないよ、俺はすぐ帰るからな。

しかし、私たちの車は砂漠のさらに奥にあるはずの羊皮のテント村に向かって竊進しているのである。

彼女がいる日本から離れば離れるほど、実質的には彼女が近くなるのが私たちの映画の仕事なのだ。